

# 京都府のカヌー競技における選手確保と国際的なチャレンジ

— 100年続けるために —

京都府立久美浜高等学校

小 西 鉄 也

## 1 はじめに

昨年度、京丹後市久美浜町において平成 27 年度全国高等学校総合体育大会カヌー競技が行われた。開会式では久美浜湾を背景に仮設物の設置を必要最小限に抑え、丹後の自然風景そのものを演出に取り入れた雄大な雰囲気の中、大会はスタートした。京都府代表としてこの大舞台で戦った 3 年生は、京都府立久美浜高校カヌー部 30 期生であった。彼らのうち何人かは、5 期生が監督を務める久美浜ジュニアカヌーチームの 1 期生でもあり、また、11 期生が彼らの中学校時代のカヌー部顧問でもあった。この両指導者は、大会では役員として彼らの活躍を見守り、彼らの教え子であるエース村野武広は惜しくも 2 位であったが、地元の意地を見せた。また、現久美浜高校カヌー部顧問（4 期生）と京丹後市職員（3 期生）が大会事務局を務めた。全国高校総体を久美浜湾で開催することは、平成 21 年度大会に続き 2 度目のことであったが、京都府のカヌー関係者にとって非常に感慨深いものであった。カヌーが久美浜湾に初めて浮かんでから 30 年以上が経ち、30 年前選手であった幾人かの卒業生は、今度は保護者として子どもがカヌー競技に励む様子を見守っている。

本研究では、京都府のカヌー競技が始まってから 30 年が経過し、その間に多くの競技者を輩出してきたが、これまで京都府のカヌー競技全体で築きあげてきたものは何か、さらなる競技力向上に向けてどのような部分にスポットを当てて強化していくべきなのか、について考察した。

## 2 カヌー競技について

### (1) カヌーの形態

カヌーには、甲板の無いカナディアンカヌーと、漕ぎ手が座るコックピット以外は甲板で覆われたカヤックがあり、カナディアンカヌーには片端に水掻き（ブレード）の着いたパドル（舷に固定されていない一種の櫂）が用いられ、カヤックは両端に水掻きの着いたパドルが用いられている。カヌーはこのパドルを用いて艇を前進させられるが、最大の特徴は漕ぎ手が艇の進行方向に向いていることである。

### (2) カヌー競技の種類

#### ①カヌースプリント：（京都府高体連カヌー専門部実施）

静水面で 1 人乗りから 4 人乗りまでの艇にのり、一定の距離（200m、500m、1000m）と水路（レーン）を決めて複数の艇が一斉にスタートして最短時間で漕ぎ、着順を競う競技。カヌースプリントはカヤック部門（K）とカナディアン部門（C）に分かれている。



#### ②カヌースラローム：オリンピック種目

流れの上流からもしくは逆に下流から吊るされたゲートを通る技術とスタート地点からゴールまでにかかった所要時間の両方を競う。スキー競技と同様に 1 艇ずつスタートし、ゲートに接触したか、非通過のゲートが有るか否かによる減点ポイントと所要時間が計算され順位が争われる。



#### ③カヌーワイルドウォーター

河川の激流をくだり所要時間を競う種目。障害物となる岩や流れを読む力が求められる。



#### ④その他種目

カヌーポロ、ドラゴンカヌー、フリースタイルカヌー、カヌーマラソン、カヌーセーリング、ラフティング、シーカヤックなどがある。

### (3) オリンピックでの日本選手の活躍

オリンピックには、1964年の東京大会以降、日本が参加しなかった1980年のモスクワ大会を除いて毎回選手を派遣し、1984年のロサンゼルス大会では、カナディアンシングルで井上清澄が6位入賞を果たし、福里修誠・和泉博幸のカナディアンペアも8位に入賞した。2004年のアテネ大会では、女子カヤックフォア（4人乗り）が女子選手としてはじめて決勝に進出したほか、世界選手権やワールドカップでも上位に入賞するなど日本選手の国際競技力は高まってきている。

そして、2008年の北京オリンピックでは、スラローム女子シングルで竹下百合子が4位に入賞。フラットウォーター（現、カヌースプリント）では女子カヤックダブル500mで北本忍・竹屋美紀子が5位、女子カヤックフォア500mで北本忍・久野綾香・竹屋美紀子・鈴木祐美子が6位入賞と日本のカヌー競技オリンピック史上最高の成績を残した。また、この北京オリンピックへ選手・役員14名の選手団が派遣されたが、これは1964年東京オリンピックに開催国として参加した選手団と同数の選手団であり、カヌーの国際的な実績が高く評価された結果と言える。2012年のロンドンオリンピックにおいては、カナディアンシングル200mで阪本直也が8位入賞を果たした。そして2016年、リオオリンピックではカヌースラローム男子カナディアンシングルで羽根田卓也が銅メダルを獲得した。オリンピックカヌー競技で日本選手初のメダルであった。

## 3. 京都府のカヌー競技について

### (1) 歴史と成果

京都府のカヌー競技の歴史は1988年（昭和63年）の京都国体に始まる。1984年、初代カヌー部監督、坂東美紀教諭により久美浜高校にカヌー部が創設される。当時、カヌーというスポーツを知る人は地元非常に少なく、国体に向けた選手の育成は困難を極めたが、そのような状況の中、カヌー競技京都府代表チームは天皇杯1位という成績を残す。当時、高校2年生として男子カヤックフォアに出場し全国優勝を果たしたのは前久美浜高校カヌー部監督安井國士教諭であった。私は、坂東教諭、安井教諭からバトンを引き継ぎ、現在、久美浜高校カヌー部の監督を務めている。また、京都府にカヌー部を設置している高校は2校だが、もう1校の京都府立綾部高校も、京都国体を選手として戦った増田教諭から現在、教え子である片山教諭へとバトンパスがなされている。久美浜高校においては30年で3代目、綾部高校においても20年で2代目と、10年に一人のペースで、比較的順調に指導者の世代交代が行われている。現在も、全国で活躍する選手も順調に輩出しており、両校カヌー部卒業生が体育系の大学で教職を学び、次世代の指導者となるべく、勉学・研究に取り組んでいる。

各カテゴリーにおける指導者について、小学生年代には、地元で就職した高校カヌー卒業生が中心となり指導している。中学生年代については久美浜中学校では高校、大学とカヌーを経験した教員が指導している。高校生年代ではカヌーを専門的に指導できる指導者が久美浜高校に2名、綾部高校に1名、カヌー部のない高校に在籍する教員が4名いる。

各カテゴリーにおける活動については、小学生年代は、久美浜ジュニアカヌーチームと和知ジュニアカヌークラブが活動している。中学生年代は現在、久美浜中学、和知ジュニアカヌークラブが活動している。高校卒業後も大学へ進学し、カヌー競技を続ける選手も少なくない。日本代表として国際大会に出場する大学生選手の存在は、小学生、中学生、高校生のキャリアモデルになっている。

上記のような変遷を経て、京都国体以後、京都府のカヌー競技は全国高等学校カヌー選手権、国体での入賞を続けてきた。しかし、その間、競技力向上については指導者個人の指導力に頼ってきた部分が大きく、府内で協力しながら何とか毎年、全国入賞者を輩出してきたものの、全国的に指導力と選手数が備わったチームが増えてきている現在、さらなる競技力向上に向けて何らかの方策を取らなければ、全国で上位入賞を果たすには厳しい状況となってきた。

## (2) 課題

数年前までは、小学生から高校生までの一貫指導のシステムが一定構築されている京都のカヌー競技は、全国の中でも効率の良い育成システムとして、アドバンテージを持っていた。しかし昨今、カヌー界においても全国的にジュニア期からの一貫指導が主流となり、育成システムがあることだけでは、全国大会の上位入賞が困難となってきた。選手強化に向けたジュニア期からの育成プログラムの内容をいかに充実させられるかが、課題となっている。

近年、中学生の進路選択は多種多様となり、また、十数年前と比べ通学圏は広がり、選択肢が増えている。それによりジュニア（小学生）からカヌー競技をスタートし、小・中と続けても、高校で競技を続ける選手が安定的に確保できないという現状がある。さらに、少子化に伴い、10年前と比べ京都府北部の各公立高校では相対的に定員数は減少している。各校とも、自校の特色をアピールし受験者数を増やす努力を行っているが、久美浜高校では10年前に比べて生徒の定員数は半分近くにまで減少し、現在、一学年が3クラス、全校生徒は250名以下となっている。少子化が特に深刻な京都府北部の公立高校では、運動クラブ員の確保は喫緊の課題となっている。

## 4. 指導者の育成

山本五十六の「やってみせ、言って聞かせて、させてみて、ほめてやらねば、人は動かじ。」という言葉は人材育成の場面でよく引用される。つまり指導は教えること、伝えることが中心であるが、さらには見せることが大切で、いかに相手をやる気にさせられるかに真価が問われる。これは選手の育成には当然当てはまるが、「指導者」の育成においても同様で、指導者となる者にどのようなことを見せられるかが重要である。大きな目標をチームや組織が掲げた時に、指導者は誰よりもその目標に対して正面から立ち向かう姿勢を持つべきである。その姿を、次世代を担う者に見せることが大切である。

各カテゴリーでは次代の指導者を育成する為に、指導の現場で先輩指導者と一緒に若手の指導者がコーチの立場で参加してもらう機会を持つようにしている。責任感と指導のモチベーションを高めるために全国大会直前の大切な局面での練習にも参加してもらうようにしている。また、日本カヌー連盟が主催する指導者講習会等には若手の指導者が参加する機会を増やしている。

## 5. 選手の発掘・育成

### (1) 京の子どもダイヤモンドプロジェクト（京都きっず）について

全国的に「ジュニア期からの選手育成」がキーワードとなり、高校までにカヌー競技を経験し計画的な育成プログラムを受けた選手が、全国高校総体でも優秀な成績を残している。京都府でも久美浜ジュニアカヌーチーム、和知ジュニアカヌークラブが活動し、現在までにジュニア日本代表選手を輩出してきた。しかし、今後のさらなる競技力向上のためには「育成」という視点に加え「発掘」という試みにチャレンジしていくべきだという声が、協会や専門部で高まってきた。そこで京都府が平成23年度よりスタートさせた、未来のトップアスリート発掘・育成事業としての「京の子どもダイヤモンドプロジェクト（京都きっず）」に、平成27年度からカヌー競技も加わることになった。現在、この育成プログラムでは、子どもの競技力の向上とともに、豊かな社会性と人間性を育むプログラムが展開されている。具体的には、協会が実技指導を週に1~2回行う「専門プログラム」と、以下に挙げた8分野から成る「共通プログラム」で構成され、年間30回程度実施している。

#### ①フィジカルプログラム（協力：同志社大学）

走・跳・投の基本動作やバルシューレ（ボール運動）を基本としたトレーニング

#### ②コンディショニングプログラム

体のバランスに重点を置き、総合的な体力を向上させるトレーニング

③インテレクチャルプログラム（協力：立命館大学）

自分とスポーツの関わりについて考え、オリンピック教育、京都の自然と伝統文化を学ぶなど、世界へ通じる人材育成を目的とするプログラム

④トレーニングキャンプ

京都市、府北部地域等で実施するスポーツ選手としての宿泊・合宿体験

⑤ファミリープログラム

保護者への栄養サポートや各種プログラムの理解を深めるための講座

⑥国際経験プログラム（協力：同志社大学）

外国人講師や帰国子女を招き「英語でスポーツ」と題したコミュニケーション開発プログラム・海外遠征時の出入国手続き体験、異文化体験、現地児童との交流など

⑦リサーチプログラム（協力：京都府医師会）

効果的な育成に向けた「京都きつず」の心身の成長の記録や測定記録のフィードバックなどの調査及び研究

⑧メディカルプログラム

スポーツ障害の予防、健全な発育・発達のためのサポートなど保護者対象の講座

(2) 京都きつず参画によって得られたもの

今まで地元の児童生徒のみを育成対象とするシステムであったものが、このプロジェクトに加わることにより、京都府全域で選手発掘を行うチャンスを得た。この事業に参加し、専門部として、また協会として様々な可能性を見出すことができた。

選手を選考するオーディションは、1次オーディションで基礎的な運動能力及び基礎的身体動作テスト（京都府教育委員会主導）を行い、2次オーディション（協会主導）では専門種目の適性テストを行う。今まで協会としても専門部としても、カヌー選手を選考する適性テストを考案したことがなかったため、テスト内容の決定には苦労したが、NF（日本カヌー連盟）からアドバイスをもらうなど、結果的には専門種目に必要な適性とは何かについて学ぶ良い機会となった。

さらにこのプロジェクトに関わることで、様々な関係機関とつながり、トップアスリートの育成に必要な専門的指導の充実を図る機会と、アスリートのジュニア期育成において最重要視されるべきは、知識と実践力を兼ね備え、「知・徳・体」のバランスのとれた人材を育成する視点であることを確認することができた。厳しいオーディションを通過した京都きつずのメンバーは運動能力、競技に対する意識も非常に高く、今後も全国レベルの大会でも活躍することが期待できる。指導する我々指導者のスキルアップも必要とされる中で様々な学びが得られるのではと考える。

## 6. 国際的なチャレンジ

(1) ホストシティ・タウン事業と関西ワールドマスターズゲーム 2021 について

京都府京丹後市は 2020 年東京五輪・パラリンピックで、事前合宿などを通じて各国と国内の自治体が交流を図る、政府の「ホストタウン」事業の登録を受けた。これは平成 16 年度から京都府競技力向上対策本部事業「日本代表・トップアスリート交流事業」や、京都府カヌー協会、公益社団法人日本カヌー連盟事業により、元韓国五輪代表選手 2 名が指導している韓国ソサン市ソウリョン高等学校と久美浜高校カヌー部等の交流事業を続けている点が評価されたとみられる。この事業では国から財政支援が受けられ、京丹後市は今後、韓国とオーストラリアのカヌーチームの合宿誘致などを進める予定をしている。京丹後市では毎年、全国最大級のドラゴンカヌー大会が開かれており、市民にとっても「カヌー」は地域の魅力を伝えるスポーツとして親しまれる存在となっている。また、同市は山陰海岸ジオパークの特性を生かして、

カヌーを使った体験型観光を進めている。さらに京丹後市はホストタウンとして築いた基盤を東京五輪後も生かす考えで、2021年に関西で開かれる生涯スポーツの国際総合競技大会「関西ワールドマスターズ2021」におけるカヌー競技の誘致を目指している。

## (2) ホストシティ・タウン事業及び関西ワールドマスターズに参画することで得られるもの

本事業で交流を行う韓国やオーストラリアはカヌー競技の国際大会では上位の成績を残す国である。カヌー競技において国際競技力の高い海外のチームがどのような指導法で選手強化のシステムを構築し実践しているのかを学ぶことで京都の選手強化に繋げることができる。また、京都府の選手達も海外選手との交流の中で技術面の向上だけでなくモチベーションアップにも繋がると考えられる。関西ワールドマスターズの開催については、今まで経験したことのない規模の大会に関わることになるだろう。久美浜湾で国際大会が開催されることになれば、さらに地域の活性化に繋がる。その日を迎えるまで地域の方との交流を深め、多くの方から応援をしていただける組織にならないといけない。

## 7. 「研究から見えてきたもの」

### (1) これまでの京都府のカヌー競技全体で築きあげてきたものは何か

京都府内でも小規模校である久美浜高校を中心としたカヌー競技のこれまでの発展は、まさに挑戦の歴史そのものであった。カヌーという乗り物さえ知らなかった高校生たちの、全国への挑戦から始まった久美浜のカヌーの歴史は、今や地域の方が愛してやまない生涯スポーツへと発展を遂げた。京都府のカヌー競技が国際大会を誘致するまでに発展した要因としては、「カヌーを通じて地域貢献」を合言葉に行ってきた競技以外の活動によって、市民の方との間に信頼関係が築けたからではないかと考える。また、多くの卒業生が、それぞれの関わり方で今も京都府のカヌー競技を支えてくれていることは非常に大きな意味を持っている。

京都府のカヌー競技は、様々な公共事業に参画することでその知名度を高めてきた。その結果、地元の子どもたちにカヌー競技を知ってもらい、競技者の拡大にも繋がっている。国際交流は、指導者にとって海外の最新の指導法を学び、コーチングスキルの向上にも繋がる機会となり、日本選手の競技力向上に非常に有効な事業となるはずである。また、指導者の育成については、常に次のバトンパスを意識し、学校教員に限らず多くのカテゴリーの指導者が育てる流れができつつあり、この流れを大切にしたい。

### (2) 課題

「京の子どもダイヤモンドプロジェクト（京都きっず）」や、各カテゴリーのチームの運営について共通する課題としては、「指導者の確保・育成」の問題がある。各事業への参加については、競技力の向上及びカヌー競技の普及に向けて意欲的に取り組んでいるところではあるが、指導スタッフの数については一定数から増えていない。今後、指導者の数を増やし、京都府のカヌー全体の指導力の向上を図らなければ、一部のスタッフに負担がかかることになる。また、指導の質も落とす結果になってしまう。新たな取り組みに挑戦するとともに、同時に指導者を増やしていく必要がある。

## 8. 「おわりに」

私が常日頃、指導者として心がけたいと思っているのは、我々指導者・コーチは「知恵」と「経験」を持った大人として、子ども達が「やったことのないことに挑戦する」→「失敗をする」→「工夫する」このサイクルを見守り、「あきらめない」大人に育てていくことである。スポーツの指導というと、指導者がメニューを与え、効率の良い動きを教え、選手はそれに応じるという関係になりがちであるが、この繰り返しだけでは「教わらなければ、始められない」という大人を育ててしまう。ゼロから「より良く」を目指し、自分

で目標を設定してスタートを切れる選手・未来の大人を育成することが何よりも大切ではないかと考える。

そこで私は選手達が行う「目標設定」の手法について力を入れて指導をしている。選手達が大会や記録会に向けた目標を立てる際には次のことをポイントに指導している。

(1)明確で具体的（できるだけ数的に表せる目標）なもの

(2)達成の期日を明確に記載する。

選手にとって「目標を設定すること」は競技に取り組む上で極めて重要であると考えている。目標設定が曖昧で指導者と選手が共通理解できていない場合、いかに高度なトレーニングメニューに取り組んでも良い成果には繋がらないだろう。

京都府のカヌー競技は30年という月日をかけて、様々な人に支えられながら成長を遂げてきた。スタートから30年、京都府のカヌーを支えてきたのは、そこに関わった多くの人の弛まぬ努力と積み重ねてきた挑戦、そして地域の方との「信頼関係」であった。坂東教諭によると、久美浜でカヌー競技を始めた当時は地元の漁師さんに練習する水域について何度も頭を下げお願いに回ったそうである。そのような経過を経て、30年、今では休日になると小学生、中学生、高校生合わせて80名近くが同じ場所で練習を行っている。練習中も高校生が小学生にアドバイスの声をかけたり、練習後には学年の垣根を越えて触れ合う姿が微笑ましい。

今日まで京都府のカヌー競技に対し、支援・協力して下さった方々への感謝の気持ちを忘れることなく、さらに京都府におけるカヌー競技の発展を願って、研究のまとめとする。

#### 【参考文献】

- ・公益社団法人日本カヌー連盟ホームページ <http://www.canoe.or.jp/top.html>

